
執行猶予小説激練

ひとやすみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

執行猶予小説激練

【Nコード】

N4079A

【作者名】

ひとやすみ

【あらすじ】

タイトルのとおり、小説訓練させていただいています。短編に満たないショートショートで、電車の待ち時間などに読むことのできる長さになっております。お気軽に楽しんでいただければ嬉しいです。

題1練 裸駅

その夜、コンタクトレンズが眼球の裏側に入ったまま、中学生に因数分解を教えた。

塾の講師なんてやってると、なかなか大変である。

部活帰りの子供たちの授業を受け持つと、帰りは10時を過ぎてしまふ。

「おつかれさまでーす」

塾長にあいさつをして、駅まで向かう途中。僕はとうとう諦めた。

コンタクトレンズのことだ。

視界はぼやけているし、眼球は異物感で不快だし、もう限界だった。道端で、コンタクト歴8年のテクニックを発揮し、眼球からそれを取り出した。

取り出してはみたが、もう装着したくはない。そこで、諦めた。ぺっと地面に捨てる。

両目の視力に差があると気持ち悪くなるから、大丈夫な方のレンズも外して、ぺっと捨てる。使い捨てだから、という気軽さもあった。ああ、これで最悪の不快からは解放された。けど、

僕の裸眼視力、0.05。

もちろん近くであれば周りに何があるかわかるし、自分の家であれば、自由に歩き回れる。が、たとえば僕が学級会の議長をやったら、クラスの数人が挙手をしたところで、使命するのは難しい。顔がぼやけて見えないからだ。勉強だって満足にできない。テレビだって内容がよくわからない。料理だって怖くてできない。

これはつまり、障害だ。

どこも悪くない人間と比べて、生活に支障がある人間なのである。

裸眼の僕は、障害者だ。

よって、何百回と足を運んでいる駅さえ、足取りは覚束なくなる。慎重に慎重に、と神経を集中させるほど、階段を下りる足下はあぶ

なつかしい。

失敗したなあ。痛くても痒くてもコンタクトを捨てるんじゃないかなあ、と後悔しはじめたときだった。

駅のホームへ降りていくところで、迷うことなくエスカレーターを選んで下っていた僕の横を、男性が健康的な足取りで階段を下りていった。

その靴音は、リズム良く、聞き心地が良かった。危なげに歩いている僕と大違いだと思った。でも、その男性は服を着ていなかったのである。

ぎょつとした僕は、視力の悪い目を大きく開けて、それから細める。靴を手に持ち、靴を履いている以外、何も身につけていないのだ。ホームに降りると、先ほどの男性は背筋をしゃんと伸ばして、地下鉄の線路を見つめている。ときどき柱時計を振り返る。

焦るやら、気恥ずかしいやら、呆れるやらで僕はひどく混乱した。そんなまさか。

肌色の衣服を全身に纏っているのか、と疑ってみる。なにせ、今の僕の視界は信用できない。

心を落ち着かせて、10メートルほど離れた位置で、彼を密かに観察した。

……どうしよう。やっぱり裸のように見える。

新手の痴漢、露出狂、はたまたストリートキング、あれ、ストリートキングだっけか？

『1番ホームに。線がまもなく到着いたします。黄色い線まで下がってお待ちください。』

ホームに、ロンドン橋おちるゝのメロディーとともにアナウンスが流れて、ベンチに座っていた客らが立ち上がり、並び始める。裸の男性は最前列を陣取って、そのすぐ後ろにキャリアウーマンっぽい女性が並んだ。

電車を待つ彼らは、携帯電話の画面を眺めていたり、文庫本に目を落としていたりしたが、誰も裸の男性に注目していない。

誰も彼を指さして、驚いたり悲鳴をあげたりしない。

頭がおかしくなりそうだった。

どうして？

現代の日本じゃ、いや何処の国だって、裸で外を歩くなんて出来な
いはず。僕がそんなことをすれば、父親は馬鹿者と僕を殴るだろう
し、塾はクビになって、なにより逮捕されてしまう。

『お待たせしました。○○線です。足下に気をつけてお乗り下さい。』

□

真っ直ぐなライトがホームに射しこみ、電車がやってきた。

裸の男性は鞆を右手から左手に持ち替え、ぴたり、と待ち列に止ま
った電車に乗り込む。座席には座らずに手摺りを持ち、顔は真っ直
ぐにホームへ向いていた。

「乗らないんですか？」

駅員に声をかけられる。僕は不器用に首を振った。

おかしいのは誰だろう？

ひとりになったホームで考える。

夜の地下鉄で、全裸の男性を見た、僕の裸眼がおかしいのだ。

そう思いこもうとしたが、どうしても彼らと一緒に電車には恐ろし
くて乗れなかった。

題2練 メタパニ

木内鮎汰はベッドに寝ころんで本を眺めていた。

アイドルの写真集だった。表紙に、水着姿の女が印刷されている。峯田みのり、という今旬のアイドルらしい。

「ああ、もう、うつとおしいな」

木内鮎汰がぶつきらばうに呟く。

「お前だよ、お前。もう気づいてるんだよ。ときどき俺のこと見てんだろ。」

けっして、綺麗とはいえない部屋の天井を睨んでいる。

彼は、中流より少し下、という家庭の設定だった。

仰向けに寝転がったまま叫ぶ。

「答えるよ！」

驚いた。

どうやら私に話しかけているらしい。

彼のいうとおり、私は、ときどきこうして彼を観察していた。生まれてからずっと。

「お前はなんだ？ 神様、なのか？」

神様……。

いわれてみればそうかもしれない。私自身まったく、そのつもりはなかったが、彼の世界を形成したのは、この私に間違いない。

「聞いてんのか？」

ちゃんと聞いている。

「神様なら、俺の願いを聞いてくれよ。」

ほう。なんだろう。

しかし驚いた。こつちの世界の住人が、私に話しかてくるなんてまあ、あり得ないことではないか。何処の世界でも、知的生命体は無限の可能性を秘めている。

「俺を、そつちの、あんたの世界に連れていってくれ」

木内鮎汰は両手を掲げていう。

……ほう。そうきたか。

「創造主のあんたにいつちゃ悪いが、こつちの世界はつまらない。クソだ。」

悪かったな。

「そつちの世界がどんなところか知りたいんだ。頼むよ。」

……。

私は沈黙した後、おもむろに答える。

『それは出来ない』

「頼む。」

『だから、それは無理だ、といっている。』

「なんでだよ、ケチ！」

木内鮎汰は写真集を床に投げつけた。1階の居間にいる母親が、こらーっと叫んだのが聞こえた。私は彼に答える。

『かつて俺も同じことをお願い請うた。だけど、そのとき、俺の願いは聞き入れられなかった。だから、俺もお前の願いを叶えることはできない。』

「は？ どういうことだよ。」

『君は知ってるかな。ハムレットに在る有名な一節を。「私はクルミの殻の中に閉じこめられた小さな存在にすぎないかもしれない。しかし、私は自分自身を無限に広がった宇宙の王者と思いこむこともできるのだ。」という』

木内鮎汰は思いっきり首を傾げている。そう、彼はシェイクスピアなど一切読まない少年なのだ。

『君もそう思っ生きてればいい。』

「意味がわかんねえよ。」

『つまり俺も、神によって創造されたひとりに過ぎないということだよ。』

私は首を捻って、顎で指して見せる。

今の彼なら見えるはずだ。

私と同じように、私を観察する存在を。
創造した存在を。

どんなに願おうとも、木内鮎汰は私が3800円で購入した『地球創造ゲーム』の登場人物に過ぎないのだ。私と同じように。
私は、なんというゲームの登場人物なのだろう。せめて、3800円よりも高いことを望む。

「……………」

木内鮎汰は妙に納得したような表情をして、床に放り投げたアイドルの写真集を手にとると、何事もなかったようにページの続きをめくりはじめた。

そして、二度と私に話しかけてくることはなかった。

題2練 メタパニ（後書き）

どこかで見たことのあるお話でしょうか。

私もそう思います（汗）2話ですでに疲れています。小説を書くってとっても疲れるのに辞められないんですよね。

題3練 夜行電車

オレンジ色の光が等速直線運動の記録のように消えては現れる。
夜の普通電車。

私は二人がけの座席の窓際に座り、ぐったりと頭を窓に凭れかけていた。読みかけの推理小説は手から滑り、シートに転がっていた。バークリーの毒入りチョコレート事件。

偶然にも、通路を挟んだ隣の席のお婆ちゃんがずっとチョコレートを齧っていて、あまりに美味しそうに食べているものだから、毒入りのチョコの話なんて読む気が失せてしまったのだ。

この電車はなかなか目的地に着かない。

静かで穏やかな空気の流れる車内で、意識は朦朧とし、何度も夢と行き来をした。浅い眠りは何度も夢を私に夢を視させた。しかし腕時計の針は五分を経過したばかりで、その繰り返しを続けている私の体と心は酷く疲弊しはじめていた。

古い電車は狭く、シートは快適でない。出口と運転席が前にも後ろについている。

ふと、私はこの電車がどちらに進んでいるのか分からなくなるような錯覚に襲われた。生憎、電車は長いトンネルに入ったので、窓の向こうに探る材料も景色も見えなくなってしまう。

このまま眠ってしまおうかと思ったけど、すでにその時間のやり過ぎ方には絶望していたので、私は思い切って座席から立ち上がった。

運賃表示板が点滅している側の運転席まで、ノソノソと歩き、『運転中は乗務員に話しかけないください』と書かれている看板も無視して、

「何時に到着するんでしょうか？」

と運転席に話かけた。少し間があつて、くたびれた顔を覗かせた乗務員が、やはりくたびれた声で答える。

「予定時刻のとおりですよ。あと、1時間ほどですね」

「ありがとう」

個々に退屈な時間を潰している乗客たちをやり過ごして、自分の座席へ戻ることにした。久しぶりの歩行と人間との会話は、わずかに私の神経をほぐした。

座席に手をかけたところで、先ほど歩いていった方向とは逆の運賃表示板が点滅しているのが目に入った。私は運転席までえっちらおっちらと近づき、話かける。

「あとどのくらいかかりますかね？」

「えーと」

目が窪みあからさまに疲労を主張しているような顔をしている乗務員が顔を覗かせ、自分の腕時計を指しながら、

「あと52分くらいですね。」

と答えた。私は礼をいい、今度こそ座席に戻ることにした。

電車はトンネルを出ていた。

窓の向こうにはオレンジの等速直線運動が続き、お隣のお婆ちゃんはチョコレートを旨そうに齧っている。

うつ、と呻いて老婆が倒れ、そのチョコには毒が混入されている。

犯人は電車のなかにいる……ばかな。

まったく馬鹿馬鹿しい想像をして、私は少しか笑った。つもりだったが、窓に映った自分の口角はちっとも上がっていないかった。

さて、結局この電車はどちらに進んでいるのかしら？

私はパンパンに張ったふくらはぎを摩る。やっぱり長時間電車になんか乗るものではない。もう、どちらに進んでいようとどうでもいい。

早く駅に着きさえすれば。

題4練 腐れないために

廃墟とは冷たく無機質なところであるべきだと思う。

少なくとも俺はそう思っているのに、ここは生暖かい空気が漂っていて、それが嫌いだ。嫌悪してるといってもいい。

ばらっ、みしっ、

瓦礫を踏み付けて足早に行く。なぜなら君が呼んでいるから。

別に自惚れているわけでない。はつきりいつて迷惑。こんな恐い場所が嫌だ。

それなのに。

君が呼んでいるから。こんな廃墟へ訪れて、スーツを着てタイまで締めて、おまけに花束まで提げている自分はどうしようもない。

此の花は何というんだっただけ。

彼岸花？

そう、彼岸花だ。死ぬ人に捧げる花を下さい、と注文して包んでもらった花。店員に妙な顔をされたっけ。

「おはよう」

ラップ現象はしょっちゅうだ。

この廃墟の住人たちは、おおよそ生きてはいないが、とても騒がしく、俺が訪れると大暴れする。歓迎されているのか拒否されているのかはわからない。こんな環境さえ慣れてしまった俺は、いつもの幽霊に挨拶をした。

赤いドレスの女だ。金髪の美しい女性。ジェニファー。

彼女は俺に好意を持ってくれているようで、君への『道』を照らしてくれる。

「ありがとう」

知ってる。

彼女は俺に恋をしているのだ。

人間同士じゃ腹の探り合いをするけど、幽霊とはそんなのする気にもならないから、綺麗に包装された花束をしきりに気にするジェニファーへ告白する。

「ごめん。これは貴女の為の花じゃないんだ。」

ジェニファーは開閉を繰り返しているドアのラップ音にかき消されてしまいそうな声で、『わかってるわ』と呟き消えてしまった。何を理解ってるっていうんだろ。

どうして女つてのは、知ったかぶりをするのかな。ジェニファーはいい女だが、死んでるくせに俗っぽいのが玉に瑕だ。

101号室の扉の前に立つ。

君の部屋。

数字に意味はない。たまたま君がいるのが101号室であるだけで、暗証番号に誕生日を使ってしまうようなバカは詐欺にあっってしまうと思う。

この前に来たときと変わらずベッドに横たわっている君。

荒れ果てた部屋の中で、不自然なほど清潔な表情で眠る君。

「久しぶり」

その頬はかすかに朱が差している。

唇は艶かしく紅い。

自分はいつか老いて醜くなるからと、君はこの状態になった。そして一人残された俺……

死に神は2種の薬をくれた。

ひとは永遠に腐らない薬。

ああ、君はすぐに眠ってしまったから、詳しいことは知らないんだ
ったね。死に神は条件をつけたんだ。それは、俺が定期的に此処へ
訪れて、腐らない薬を君に服すること。
これが厄介だった。

「バカだなあ」

眠り姫に彼岸花を。

何が不安だったんだろうか？

俺は君の劣化なんて問題にならない程には君を愛していたのにね。
まったく、どうして女つてのは見た目ばかり気にするのかな。美し
い姿のまま死にたいなんてのは、世界遺産レベルになってから真剣
に考えればよい。とんだ自惚れだ。

「……悪いけど」

死ぬまでこうして君を訪れるなんて、気の遠くなるような作業。
それを我慢出来る程には君を愛していなかった。

もう限界だよ。

スーツのポケットからもうひとつの小瓶を取り出す。

ふたつめの薬は君の命を終わらせるための薬。

哀れな男に死に神がくれた残酷な選択肢。

「さよなら」

お別れのキスだね。

次第に血の気を失っていく頬、素敵だった唇の紅は色を失い、軀は
弛緩し始める。

生命の朽ちていく様。

もう見ない方がいい。

「……綺麗だよ」

背中を向けたまま捧げる。

腐りゆく君に弔いの言葉。

B a d e n d l e s s

題4練 腐れないために（後書き）

とっても久しぶりに更新をさせていただきました。

ちよっとプロモみたいな文章になりました。

久しぶりの『小説家になろう』。作者さんが、すごく増えていらっ
しゃって、1日に更新されている小説の数を眺めるだけで興奮しま
した。すごい。

小説って1話更新するだけで、エネルギーをかなり消費しますから、
これだけのエネルギーが展示されていると思うと、いい意味で鳥肌
が立ちますね。W0921Aの作者番号が、何だかご老体に思えた
瞬間でした（笑）

題5練 やさしい目撃者

「これまで、沢山の事件の謎を解いてきましたが、
銘探偵夫が重い口調で言い放つ。
めいたんていお

「これほど、巧妙でかつ残忍な事件は初めてです！」

推理小説でいえば、後ろから20ページ目くらいだろうか。

そんな場面に、僕ら大学山岳部のメンバーは、なす術もなく存在していた。

合宿でやってきた雪山の山荘で、仲間が3人も殺されたのである。
猛吹雪のため、電話は不通。警察は明日の朝にならないと来ない。
さながら『吹雪の山荘』状態だ。

「エマさん」

「！ つ、はい」

銘探に名前を呼ばれ、1年のエマちゃんが、びくつと肩を震わせる。
「あなたが、第1の被害者である武藤田さんの部屋を出たのは、夜
中の12時30分頃でしたね？」

「ええ…はい、そうです」

「入ったのは、何時でした？」

「確か、9時頃だったと思います」

「ほう。3時間半も何をしていたんですか」

エマちゃんが言いよどむ。

馬鹿。エマちゃんと武藤田は恋人同士だったんだから、何をしてた
って、なにに決まってるだろう。

「…なにつて別に、話をしたりとか、」

「とか？ とか、とは曖昧な表現ですね」

「……だ、だつて」

「よろしい。ボクが推理して差し上げましょう。あなたと武藤田さんは、イチヤイチヤとくつつき、ラブトークを交わした後、セックスをした。これがズバリ」とかの詳細でしょう。間違いありませんね？」

「……」

「セックスをした。間違いありませんよね？」

「っ、間違いないわよー!!」

エマちゃんが顔を真っ赤にして怒っている。

自分で推理するなら、わざわざ聞くなよ。最低のセクハラだ。部長の関ヶ原が耐え切れず、「おい」と低い声で銘探を威嚇した。

思えば、この男が、白熊か雪男と見間違うような酷い容貌で、『いやあ、気持ちよくスノーモービルを飛ばしてましたら、遭難してしまっ』

命拾いをしました、と山荘を訪れたときから、妙なことが立て続けたのだ。

自称、名探偵らしい。

が、僕には、髪がアフロの汚らしい変態のオッサンにしか見えない。コイツさえ来なけりや事件は起こらなかったのでは、と思うくらいだ。（名探偵という輩が寄り付きさえしなければ事件は起こらないのに、と考えているのは僕だけだろうか？）

「失礼。では、推理を続けましょう」

ていうか、お前も正しいよ。帰れよ。

おそらく全員そう思っているが、口には出さない。なんだかんだいっても、殺人事件。みんな動揺しているのだ。一番落ち着いているのは銘探だ。

「第1の事件では、被害者がタロットカードの『逆さの男』のように天井から吊り下げられていました。第3の事件は、被害者がキリ

ストのごとく風車に磔はりつけにされていた。そして、第2のの事件では、エマさんとセックスをした被害者が斧で頭を割られ殺されていたわけですが……」

銘探が厚いタラコ唇を舐め一息つくと、鋭い眼光で僕らを睨み、続ける。

「ボクたちは第1と第3の事件の、惨状の派手さに惑わされてしまった。注目すべきは、第2の事件だったのです。エマさんが武藤田さんの部屋を出てから、翌朝に死体が発見するまでの約7時間。この別荘は、不幸にも野生の人食い狼に囲まれ、外からも内からも入りが不可能だった。よって、犯人は別荘内にいた者、かつ、その時間にアリバイがない者だということになる！　そう、犯人はこの中にいる……！」

もちろん僕も動揺している――

ここで僕は、ある告白をしなければならない。

「おっと、エマさんは犯人から除外しますよ。かなり重量のある凶器の斧を使い、身長190センチもある被害者の脳天をかち割るという芸当を、女性のエマさんが到底出来るとも思えないですからね。同じ理由で、他の女性らも犯人から除外できます」

女性陣が、ほっと肩を撫で下ろす。

さて、残るのは、僕と関ヶ原さんと副部長の半田さんだけ。

実は『ある告白』というのは――

何を隠そう、僕が今回の事件の『目撃者』であるということだ。

新入部員の高木を、ダイニングの天井から『重てえ』と呟きながら汗だくになって、吊るしていた――半田さんを！

武藤田を斧で襲う――半田さんを……！！

そして、OBの桜井さんの首を絞め、風車に縛り付ける――半田

さんを！！！！

偶然にも、その全てを目撃していた。

しかも、半田さんは僕が目撃者であることに気がついている。何度も目が合ったし、最後の事件では犯行後ホヤホヤの現場で『おはよう』と声をかけられた。

どうすべきか、かなり迷ったが、とうとう何も出来ずにここまで来てしまったのだ。

「残る男性陣ですが、関ヶ原さんはボクの部屋で、このボクの輝かしい経歴を朝まで聞いていたという立派なアリバイがあります。そして、同時にボクのアリバイも成立します」

ね、と銘探にウインクを投げられた関ヶ原さんが「お前が無理やり聞かせたんだろうが！」と怒鳴っている。

「したがって、犯人は彼らのどちらかということになります！」

視線が一斉に、僕と半田さんに向けられる。

「……どうです？ 自白しませんか？」

銘探が何故か穏やかな口調でいう。

半田さんをチラリと横目で見ると、こめかみに汗が伝っていた。暗く絶望的な表情をしており、こちらにまで伝わってくるほどに酷く緊張している。

半田さんは目撃者の僕を殺さなかった。

目撃者は犯行の失敗を意味する。もし、僕が犯人であれば、真っ先に目撃者を消しているだろう。でも、彼はそれをしなかった。武藤田を殺害した現場を見てしまった僕を前にして、斧を振り上げた彼は、それを僕に向けずに無言のまま現場から去った。

彼は無意味な殺人などしない。

激昂するところなど見たことがない、穏やかな半田さんのことであ

る。きっと、重大な理由があり、犯行に及んだに違いない。

1年前、半田さんが部費を盗んだときも、入院しているお母さんの手術代の為だった。疑われた半田さんが責められたとき、僕はひとり半田さんの味方をした。半田さんは大分申し訳なさそうに『悪いな』と年下の僕に頭を下げた。

今回も理由があるに違いない。人を殺すに相当する並々ならぬ動機が。

「僕がやりました！！」

決断するよりも早く口走っていた。

「おえっ」とか「まさか！」とか悲鳴に近いリアクションが一同に飛び交う。

僕も驚いた。ただ、この場の氷を服から背中に入れられるような緊張感と半田さんの苦しい青い顔に耐えられなかった。それだけだ。

「山田くん、何故そんなことを！？」

エマちゃんの肩を抱いている菊谷さんが、膠着している空気を破るかのように、ヒステリックに叫んだ。

「アタシ、貴方のこと信じてたのよ。でも、でも、見てしまったの……貴方の姿を！」

おぼつかない様子でいた部員たちの視線が厳しくなり、僕に向けられた。

「首を吊った高木くんを見上げている貴方を……血塗れの武藤田くんを見下ろしている貴方を……そして桜井さんが縛られた風車から帰ってくる貴方の姿を……全部見たのよアタシ！！」

おそらくそれは犯行を目撃してしまい、呆然と立ちすくんでいた僕の様子を見たのだろう。

なんということだ。

目撃者である僕を、目撃した人がいたなんて。

「……ま、そういうことです」

銘探がまとめる。

そういうことです、ってナンだよ。お前の推理はどうなったんだよ。

「山田、お前っ」

「この鬼！ 殺人鬼！！！」

仲間たちにボコボコにされた僕は、翌朝、パトカーに乗せられ、悲劇の山荘を後にした。車が発発する直前、半田さんが近づいてきて、僕に一言。

「悪いな」

と、大分申し訳なさそうに頭を下げた。

それは、1年前、僕が彼を庇ったときと、まるで同じ響きだった。

これでいいんだ……

うん。

これでいいんだ。

*

パトカーが去った後、半田は密に微笑んだ。

「計画どおりだったな」

吹雪は晴れ、爽やかな青い空が彼を見下ろしていた。

「よかった、あるとき殺さないで置いて」

(e n d . . .)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4079a/>

執行猶予小説激練

2010年10月11日11時30分発行